

ダンサーの純情

2008(平成20)年3月12日鑑賞〈ホクテンザ1〉

★★★★



監督＝パク・ヨンフン／出演＝ムン・グニョン／パク・コニョン／ユン・チャン／パク・ウオンサン／キム・ギス／イ・ジョンヒ／イ・デヨン／キム・ジヨン（エスピーオー配給／2005年韓国映画／111分）

特集

熱狂的ブームの去った今こそ真価を問う！

……朝鮮族自治州に住む純情可憐な少女が、偽装結婚までして韓国に入国したのは何のため？ 彼女を待ち受ける過酷な運命とは？ 夢の実現は？ そして最後に訪れる大きな感動とは？ ムン・グニョンが大鐘賞の人気賞を受賞した本作は純真無垢でフレッシュな愛の感動がいっぱい！ 本物のダンスを披露し、本物の愛を表現できるまでに成長した、韓国の国民的女優ムン・グニョンに大拍手！

まずは芸能詐欺の1コマから

いかにもピッタリのタイトルからわかるとおり、この映画の主人公は、中国東北部の吉林省南部の朝鮮族自治州にある延吉市ヨンギルからやってきた純情な少女チャン・チェリン（ムン・グニョン）。もっとも彼女は、元韓国最高のダンサーと言われた男ナ・ヨンセ（パク・コニョン）が失意のどん底から立ち直り、再度大会に出場するため、お金でスカウトされてきた「中国最高の女性ダンサー」のはずだったが、実はそれはチェリンの姉の方で、替え玉の妹チェリンは、ダンスは素人とわかったから、完全な芸能詐欺……？ 騙されたのは、ヨンセの先輩マ・サンドウ（パク・ウオンサン）。そこで、費やした資金回収のためサンドウがチェリンを酒場（売春宿？）に売り飛ばそうとしたのは当然だが、チェリンが韓国に入国するについての条件はヨンセとの結婚だったから、2人は既に正式な婚姻届を提出済み。もちろんこれは形式だけにすぎないが、インチキがバレた後、韓国の事情を何も知らないチェリンが無邪気に「いい仕事先を見つけてもらったの。ダンスも教えてもらえるの」と話しかけてくると、放っておけないのがヨンセのいいところ……？

🎬 「偽装結婚」が通奏低音のように……

このように、ヨンセとチェリンの婚姻届は実態のない偽装結婚だから、立派な犯罪。日本でもこのような偽装結婚による出入国管理法違反事件はたくさんあり、私も弁護士としてそんな事件を担当したことがあるが、この手の事件の摘発は意外と難しい。なぜなら、婚姻の意思はあくまで当事者の内心にあるから、それがホンモノか偽装かを見分けるには、①同居しているか、②結婚式を挙げているか、③披露宴はやったか、④どこで知り合い、どんな交際を経て結婚に至ったか、等の実態を調査し、その外見から判断しなければならないからだ。とくに難しいのが、同居し、夫婦として生活している実態があるかないかという点。ホンモノの夫婦だって仕事のため別居していることがあるし、必ずしも性生活が定期的に営まれているわけではないから、同居の実態、共同生活の実態だけで100%偽装が見抜けるわけではないが、大筋の見分けはつくもの。

ヨンセとチェリンの婚姻が偽装だと直感的に判断した出入国管理所のキム課長（イ・デヨン）は、部下のチェ（キム・ジヨン）を連れてその実態調査に乗り出したから、ヨンセとチェリンはへびに睨まれたカエル状態……？ この映画にはそんな偽装結婚の実態調査の様子が通奏低音のように面白おかしく（？）流れているから、それにも注目を。ところで、偽装結婚でないことを証明するにはどうすればいいの？ それは、当事者の気持になって少し真剣に考えればすぐにわかるのでは……？

🎬 1年でここまで大成長！

高1で16歳の花嫁ボウンを演じた『マイ・リトル・ブライド』（04年）のムン・グニョンは、キュートな魅力がいっぱいだった。そして『ダンサーの純情』で演じた純情可憐、純真無垢な少女チェリンのイメージはほぼその延長線。

しかし、芸能詐欺がバレ、ヨンセからも見放され、泣く泣くヨンセのアパートを出ていくチェリン。また、ヨンセがライバルであるチャン・ヒヨンス（ユン・チャン）の企みによって足のケガを負わされ、その挙げ句、ヒヨンスのパートナーとして踊るように追い込まれたチェリンが、心の葛藤に打ち勝って大会で最高のダンスをみせるシーンなど、ムン・グニョンの大成長は明らか。また、最終的にはヨンセとの真の愛に目覚め、大人の女に成長していくチェリンの姿は実に感動的。

伸び盛りの若い有望な女優は1年で大きく成長！ チェリンを演じたムン・グニョンをみていると、つくづくそう実感させられるはずだ。

ダンスはホンモノ！ こうでなくちゃ！

『Shall We ダンス？』（96年）以来、日本でもダンスブーム……？ そういえば、テレビでも私も数回観たことがある『ウッチャンナンチャンのウリナリ！！ 芸能人社交ダンス部』は、芸能人がダンス特訓をして取り組むものだが、結構真剣勝負だから面白い。アメリカのダンス映画で私が大好きだったのが『フラッシュダンス』（83年）だし、最近では『レッスン！』（06年）（『シネマルーム15』370頁参照）、『ストンプ・ザ・ヤード』（06年）（『シネマルーム15』375頁参照）、『ヘアスプレー』（07年）など、面白いダンス映画がたくさんある。

ダンス映画をつくる場合大切なことは、スクリーン上で「これは本物！」というダンスをみせること。ピアニストを描く映画では、実際にピアノを弾くシーンは映像上のテクニクでごまかさざるをえないことはあるだろうが、ダンス映画では、いくら魅力的な俳優を起用しても肝心のダンスシーンをごまかしたのではダメ。その意味で、かつての天才ダンサー、ヨンセを演じるパク・コニョンは、ミュージカル界の新星だけに実にカッコいいダンスシーンをみせてくれる。またその点は、ヨンセのライバルであり、実にイヤらしい性格を見せつけてくれるヒョンスも同じで見事なもの。

しかし、肝心のチェリンを演ずるムン・グニョンは、その役柄どおり、もともとダンスは素人……？ すると、ストーリー展開上みせるヨンセとチェリンの二人三脚によるダンスの特訓模様は、あながち映画のうえだけではないのかも……？ 映画上ではその特訓は3カ月だが、実際は毎日10時間以上の特訓が約6カ月間続いたそうだ。『Shall We ダンス？』では、役所広司や竹中直人、渡辺えり子が見事なダンスをみせてくれたが、『ダンサーの純情』ではムン・グニョンはどんなダンスシーンを……？

『花とアリス』（04年）が、蒼井優のバレエシーンを観るだけでも値打ちがあったように、『ダンサーの純情』も、ムン・グニョンのダンスは本物！ このダンスシーンを観るだけでも十分値打ちが……。

こんな殺し文句に、女はイチコロ……？

ヨンセは自分も天才ダンサーだが、パートナーを育てることにかけても天才的な能

力があつたらしい。映画の冒頭、ヨンセが自堕落な生活をしているのは、自分が育てたパートナーを金と権力にモノを言わせたヒヨンスが奪いとったうえ、役割を終えた彼女を「所詮三流！」とほざいて棄ててしまったため。

そんなヨンセが、サンドゥ先輩の勧めに従って再度ダンス大会に復帰しようとしたのは立派だが、肝心のパートナーがチェリンのような素人娘では話にならないのは当然。しかし、この子は少しは素質がありそう、そう見抜いたヨンセは3カ月の特訓でチェリンをパートナーに育てあげようとしたが、物事はそう簡単に進むものではない。そこでみせるさまざまなヨンセのパートナー育成術は興味深いのが、何よりも印象に残るのは、技術論ではなく哲学論……？

プロ野球の野村克也監督が名監督とされるのは、技術論もさることながらID野球を基礎とする野村イズムにある。野球はチームプレーだが、競技ダンスは男と女の2人のペアによって美を競い合う競技。したがって、そこにはパートナー同士の絆、とりわけ愛と信頼の絆が存在しなければならないのは当然。そこでヨンセがチェリンに教えた殺し文句は、「嘘でもいい——踊っている間は俺を愛してくれ」。なるほど、これならどんな女もイチコロ……？

架空の恋物語でも、心がこもっていれば……？

たまたまチェリンが洗面室で歯磨きをしている時に、入管調査員のキム課長とチェがやってきたのはラッキーだったが、彼らがその後買い物にもついてくるワ、ビルの屋上から望遠鏡で私生活をのぞくワとエスカレートしていったのは、キム課長が意地になっているため。

そんな入管対策(?)に向けて、ダンスレッスンの合間に2人が育てていった(口裏を合わせていった?)のは、2人の中の恋物語のストーリー。それは、チェリンの姉が1度ガイド役でソウルに来たことがあることをネタにして組み立てた架空の物語だが、それがある日大きな役に立つことに。そしてある日、ヨンセとチェリンの2人は入管の別々の部屋で調査を受けることになったが……？

知り合ったきっかけは？ 初デートは？ 等々の質問を浴びせていく中で矛盾点がないかどうかをチェックしていく、いわば「性悪説」に立った調査だが、これに対する2人の回答はすべてスムーズ。2人が交互に答えるシーンが面白いのは、2人の愛情のこもった表現方法。つまり、ウソでもいい、デッチあげでもいい、架空の恋物語

であっても、2人がホントにその役になりきって幸せを感じとり、その表現に心がこもっていれば、質問者を信じさせることなんて簡単ということだ。いわば、証人として心のコもった迫真の証言をすれば、裁判官を信じ込ませることができるとのこと……？ そうすると、09年5月以降に実施される裁判員制度における素人の裁判員は、よほど注意しなければ……。

ホタルが大切な小道具に……

入国審査において動植物や昆虫類の持ち込みが厳重にチェックされるのは常識だから、チェリンがソウルに持ち込もうとしたあるものがチェックされたのは当然。そのチェックに手間取ったため空港まで迎えに行っていたヨンセは、あやうく待ちぼうけ寸前になるところ……？ それほどまでにこだわってチェリンが韓国に持ち込んだのは、小さなビンに入ったホタルの幼虫……。中国東北部の延吉にはホタルがたくさんいるが、ソウルにはいないと聞いて大切に持ってきたわけだ。このホタルがこの映画の節目節目で大きな役割を果たすから注目！

ヒヨンスは共に見事大会で優勝したチェリンに対して、これからもパートナーとしてロンドンに進出しようと提案したが、チェリンはあっさりそれを拒否。それに対して「お前も所詮三流ダンサーか」と切り捨てたのはいつものヒヨンスの手口だが、そんなことはチェリンにとってはどうでもいいこと。そして、結局は中国へ帰る道を選んだチェリンだったが、その前にヨンセの顔を一目見たいと思ったのは当然。そこでヨンセのアパートを訪れ、屋上にたたずむヨンセの姿を見たチェリンはそれで満足し、帰路につこうとしたのだが、そこに登場したのが、今やっと成長し飛び回ることができるようになったホタル。高倉健主演の『ホタル』（01年）や『俺は、君のためにこそ死にいく』（06年）では、知覧の特攻基地から飛び立っていった金山少尉の物語の中でホタルが大きな役割を果たしていたが、『ダンサーの純情』では、延吉から持ち込んだホタルがラストのシーンで大きな役割を。

ちなみに、前述のとおり偽装結婚を偽装結婚でなくするためにはどうすればいいの？ その答えをこのホタルが導いてくれる（？）から、そんなクライマックスの感動をタップリと。

2008(平成20)年3月13日記